【十月の言葉（令和三年）】

十億の人に　十億の母あらむも
わが母にまさる母　ありなむや

明治時代の有名な宗教家である暁烏敏氏が詠まれた歌です。

虐待やネグレクト(育児放棄)の問題もあり、難しい世の中ですが、改めて母性を問われているように感じます。

名奉行として有名な大岡越前の名裁きの一つに「子争い」があります。本当の母親を名乗る二人に子供の手を両方から引っ張り合わせて、勝った方を本物の母親と認めるという裁きです。「痛いよ～」「助けてよ～」と泣き叫ぶ子供の様子に耐えられなくなった片方の母親は、思わず手を離してしまいました。「勝った！勝った！」と喜ぶもう一方の母親に対して「お前は偽物だ」越前は厳しい口調で告げるのです。子の痛みを感じられる親こそが、本当の母であると越前は認めたのです。

利己的で排他的な愛情は、仏教の説く慈悲とは明らかに異なります。どこまでも自己中心的な世界を抜けられないのが愛情であり、狭小な自我の殻を破って、他者へ向かうのが「慈悲」の心なのです。

仏さまの慈悲心は、万人に対して平等であり、永遠であり、絶対の安心へ導くことから「大慈悲心」と尊ばれます。宇宙レベルでの無限の母性です。

（吉村隆真著「心の読み薬」参照）